

「在宅ケアの未来図を創る」

ケアプロ株式会社代表取締役 川添高志氏より、「在宅ケアの未来図を創る」について話題提供をしていただいた。以下、ディスカッションの記録である。

1. ワンコイン健診とその成果

ワンコイン健診を始めたとき、保健所や医師会から“診断をしてはならない”という理由で、なんども営業の停止を求められた。しかし、たとえば検査の結果、HbA1cの値が15%であることが明らかになった人に対して、糖尿病との診断や、特定の病院の紹介はできないが、健康セルフチェックとして測定値と診断基準を伝え、受診を勧奨することはできる。法的にも保健指導は、診療の補助の範疇ではなく、正しくは療養上の世話に含まれる。生活習慣病は医療費の3割を占めており、1年以上検診を受けていないいわゆる健診弱者は36,000人ともいわれる。“良いものは広げなければならない”という信念のもと、厚労省に働きかけた結果、検体測定できる法制度ができ、有料で検査を行える条件が整った。

ワンコイン健診が普及する前から、まちの保健室などで看護サービスの無料提供は行われてきた。しかし受益者からサービスへの対価を求めるといった発想はこれまで看護にはなかった。検診に対して支払いをすることで当事者意識が生まれるという効果もある。最近では企業がサービスとして、例えば消費者が商品を購入した際の付加的サービスとして検診を提供している。その場合は前述のような当事者意識は生じにくいかもしれないが、無料だからこそ検診を受けることができ、異常の早期発見につながったケースも実際にはある。

2. 企業家やニーズの掘り起こしができる人材を育てる看護教育

両親からの影響、学部時代の経営学部の講義、企業に関心のある人々と交流だけではなく、看護の先輩方が開拓してきた姿にも影響を受けてきた。看護未来塾で、看護ビジネスプランコンテストのような企画をして、優秀なプランの作成者には賞金を与えるなど、ベンチャー支援をしてはどうか。看護師でありかつ経営者であることは重要であり、経営のみを専門とする人では利潤の追求に傾きがちなので、看護の視点をもちながらのビジネスの創造は難しい面もある。看護師であり、経営者ともなる人材を増やした方がいいのではないかな。

3. 訪問看護ステーションにおける新人教育

訪問看護では、より多くの職種の連携が必要であり、関係性をつくる力が求められる。訪問看護ステーションで新人看護師を一人前に教育するには、OJTに基づいた現場指導が欠かせない。それには新人看護師1人に対して先輩看護師が5人以上は必要である。今後、卒後研修が義務化されること、研修費を都道府県等で負担する体制ができることが望ましい。ケアプロが島根県雲南市に設立した訪問看護ステーションは、こうした基金をもとにつくられたものである。医師の卒後研修に関しては、病院等の比較的大規模なところで行われることが多いが、看護に関しては、訪問看護等の小規模の施設でも、十分な教育を提供できる仕組みを作る必要がある。

退院後、訪問看護が必要となった場合、人工呼吸器を装着したまま退院するなど、医療依存度の高い対象者の方が増えている。そのような対象者を新人看護師が担当する場合は、必ず指導できる看護師が

テーマ1

同行し、ケア場면을振り返る必要がある。現場で指導に携わっている看護師らの意見では、新人看護師よりもむしろ、経験年数が少ない既卒の看護師のほうが、どのような看護技術がまだ経験できていないかを把握しにくいという声がある。